

Building lifestyle around Ferrari

伝統を受け継ぐといふこと

今号の表紙は、東京駅の前で撮影したグリジオ・イングリッドのGTC4ルツツT。
そのシチュエーションに、今号のテーマを潜ませて頂いた。



まずは、表紙の話からしたいと思う。"史上初の4シーター V8 フェラーリ"であるGTC4ルツツTを、なぜ東京駅の前に置いたのか。もちろん、街灯の光で妖しく輝く"グリジオ・イングリッド"を纏った佇まいが、上品な場所を求めたということもある。しかし、それが女優イングリッド・バーグマンに由来する伝統的なボディカラーであるのはもちろん知っていたから、それに見合う、伝統を感じさせる場所にしかつたのが一番の理由だ。ただ"古い"なら、他に選択肢はいくらでもある。そこで東京駅に決めたのは、その駅舎を生かしたホテルへと生まれ変わっているから。つまり、"古いもの、伝統的な何かを活用しながら新しい何かを生み出している"からである。この伝統の"受け継ぎ方"こそが、今号における最大のテーマだ。表紙のタイトルには『跳ね馬、その伝承』と入れさせて頂いた。

そのテーマに行きついたのは、P30〜で展開している、昨年の『夏・秋編』に続く第2弾となる『北陸特集』だ。そこで出会った多くの方々は、地元の伝統とよさを他の地から俯瞰することで見直し、それを生かしつつ新たな何かを生み出そうとしていた。その熱意、情熱こそが"生きていること"、何だと思う。人は何のために生まれ、何のために生きるのか……などという哲学的な話をする気は毛頭ないが、その生き様や熱量を伝えるこ

と、そういった『人間賛歌』に、このところ強いモチベーションを覚えるようになった。

そこで本来、北陸特集だけのテーマと思っていた伝統の継承を、誌面内で拡散することとしたのである。タイトルに入っていないけれども、密かにそういう内容になっているものもあるので、そういった視点で今号をお楽しみ頂ければ幸いだ。



締め切り前となる3月上旬。昨年に続きジュネーブ・ショー取材に行ってきた。その直前にはミラノにも滞在し次号用の取材もしてきたのでご期待頂きたいのだが、上記のような伝統の継承を日本人よりも遥かに上手に、自然に行なっているのがまさに欧州の人々だ。建物、食事、文化など、その全てにおいて。

恥を忍んで告白するならば、20歳の時に初めてロンドン、パリを旅行で巡った時に、"ヨーロッパは終わっている"と感じた。新しいものが何もないじゃないか、と。例外はパリのラ・デファンス、つまり新凱旋門周辺くらい。しかし"恥を〜"と書いたとおり、それは表面しか見ていない浅はかな考えだった。

急速に進むメディア形態の変化の中で、"紙媒体"を続けることに抵抗を覚える日はゼロではないが、少なくともそういったモチベーションを覚える行為に勤しみ、若き日の恥を振り返ることもまた"生きている"ということなのだろう。

